

コンがら急増で活用に苦慮

都内の旺盛な市街地再開発需要に伴う既存建物の解体増加などを背景に、アスファルト合材工場へのコンクリートがら（コンがら）の受け入れが急増している。日本アスファルト合材協会がまとめた東京都出荷圏工場の数量推移によると、2023年度にアスファルト合材がら（アスがら）の受け入れ量をコンがらが逆転した。受け入れきれないコンがらは、近県の合材工場にも流れているという。

東京都出荷圏工場のアスがら数量は、21年度に135万ト、22年

東京圏の合材工場

度に131万ト、23年度に132万トとほぼ横ばいで推移。一方、コンがらは、21年度に108万トだったが、22年度に126万ト、23年度は140万トまで増加し、アスがらを上回った。千葉、神奈川、両県の出荷圏工場はこの3年間、既にコンがらの方が多く、埼玉県工場でもコンがらがアスがらに迫る勢いとなっている。

道路工事で、アスがらはメイン

の舗装工事に使う再生合材に活用できるが、コンがらは路盤材などに使用用途が限定される。道路補修工事は、切削オーバーレイが多く、路盤まで再整備するケースは少ないという。合材工場側は、大量のコンがらの活用先を十分に見いだせず、対応に苦慮している。

日合協の担当者は、リサイクル促進の観点も含めて、路盤補修などコンがらを生かせる工事の増加が必要と訴えている。また、地方によっては、コンがらのニーズが高いところもあるため、流通面で

の行政支援なども望んでいる。

アスがら上回る異例の事態

